
俺の夢は魔法使い

ポチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の夢は魔法使い

【Nコード】

N1286Z

【作者名】

ポチ

【あらすじ】

熊本のとあるアパートに住む伊明紘人^{いめこうと}15歳はある日課題であった作文で夢を発表。だがその夢は魔法使いとゆうありえないものだった。
クラスメイトや先生に馬鹿曰された挙句異世界にいける（かもしれない）鍵ー亜空間転送keyをとられしかたなく家にかえた。
この日から紘人の人生は大きく変わっていった・・・

第1話 俺の夢（前書き）

ぶっちゃけ初めてなんでつまんないかもですがどうぞ暖かい目で見
守ってやってください

第1話 俺の夢

『魔法』それは誰もが一度は使いたいと思ったものだが時がたつにつれそんなものはゲームやテレビだけ……と分かってしまった

キンコンカコン

休み時間の終わりのチャイムが鳴る。

次の時間は確か……国語だ！ ふっ！ そうか……ついに俺の夢語る時がきたのか

ぜってえ皆んな俺の夢に感動すつだろうな……

「この間の課題の『自分の夢』について発表してもらおう。そうだな

……

紘人！

おお！いきなり俺！

悪いな皆んな……俺の夢を聞いたあとは全員の夢が色あせちまうぜ！

「はい！」

「僕の夢……それは！偉大な……魔法使いになることです！」

第1話 俺の夢（後書き）

主人公の名前の由来

伊明^{いめい}紘^{ひろ}人 Ich t r ? u m e . （ドイツ語でわたしは夢見る）

イヒトロイメ 並び替えて伊明紘人

ネーミングセンスなっ！とかゆうのは心の中にしまっっちゃってくだ
さい><

第2話 異世界（前書き）

2話めつづけて（？）投稿）．．．（

第2話 異世界

たく……

なんだよ……俺の素晴らしい夢を聞いて皆んな自分の夢が色あせちまったからってあんなに俺の夢を否定しなくても……

全くやだね〜自分の夢が俺と比べて小さかったからって……

俺の……俺の……

大事な……

魔法のある（かもしれない）異世界に行ける（かもしれない）亜空間転送keyまでなくしやがって！！

ハア〜

とっ……いろいろ考えてるうちに家通り越しちまうところだったにしても散々な一日だったな〜

ガチャ

鍵をさして扉をあける。

「ただい」

家に帰ったらただいま！と母によく言われていたため一人暮らしでもきちんとめんどくさがらず言っ。

だが今回は紘人意外に居るはずもない部屋から声が帰ってきた。紘人の声をさえぎって……

「きゃああああああああああああああああああああああああああああ」

……あ、あれ〜？

「あ、あの部屋間違えてますよ」

なんなら狼らしく君を引きちぎってたべてあげようかあ〜？
『ボキバキッ』

こっ怖い！！てゆうか痛い！喋りながら僕の腕を握り潰しちゃって
るよこの子！

「いぎゃああ！！ 痛い！ 痛い！ つすいませんした〜！！！」
「

「まったく！ で？君はなんで私の家にいるんだ？」

うわ〜この人俺の腕握りつぶしたくせに悪気すらないのかよ……

「えと〜……カクカクシカジカなわけで異世界のここについたのか
と……」

とりあえず事情説明

フロアの顔が少し険しくなったのは亜空間転送keyの名前をだし
てからだった。

「……君が言っているその亜空間転送keyはもともこの世界の
異世界について

研究していた者達で作ったものだ……なぜ別世界の住人の君が持
っている？」

何言つてんだこいつ？

「この鍵『亜空間転送key』は俺の……俺の住む世界の親父が作
ったもんだぞ？」

「……君は本当に異世界の住民なのか？この世界の住民ではないの
か？君が父と思っている

人は本当に君の父なのか？魔法でもない限りそんなものはない
ない！ 作れたとしても

どんな技術を使えばそんな小さな鍵の状態まで縮めることができ

る？」

「な、なにいつてんだよ！ この世界の住民？ふざけんな！ 俺の親父は伊明鑄虞（いめい

いるぐ）だけだ！ 親父は俺が生まれてからずっとこの研究をしてたんだ！ 鍵みたいに

小さくする時間だってあったはずだ！」

俺が親父の名……伊明鑄虞の名前を出した瞬間フロ の顔つきが変わった……

まるで「獲物」をみるような顔に……

第2話 異世界（後書き）

早速も感想で指摘を受けてしまったので指摘された箇所を直してみました。こうしてみると話がすごい唐突すぎて訳が分からないものだったことに…

なので話の内容がとてつもなく変わっております（・・・）
これでも最後らへんはちょいっと話が唐突になってしまいました…
指摘してくださった方本当にありがとうございます><

第3話 伊明鑄虞（前書き）

鑄虞の名が出たとたん顔つきが怖くなったフロー。一体何が？
今回は鑄虞のお話。

第3話 伊明鑄虞

ぐ……鑄……鑄虞！

……？

なんだ？……

声が……聞こえる……

「おい鑄虞！　ここから出してくれ！」

誰だ？さっきまでフローと話していたはず……

……？

フロー？誰だ……それは？

鑄虞……

アあソうだワタシはイるぐ……

「鑄虞！　ぼっとしてないでこの檻をどうにかしてくれ！」

「ああ……すまない」

Flamme　verbrennen　DracheGes

taigt　（炎、燃やす、竜の姿で）

ルンを呟く。

次の瞬間ゴツと音をたて竜の姿をした炎が声が出た方向に飛んでゆく。

ジユ　つと音を立て声を発した生き物を閉じ込めていた大きな檻を溶かす

「あぶね〜な〜……」

檻の中に閉じ込められていたのは身長はゆづに2mはあるだろう大男。

体はどんな攻撃でも筋肉だけで防げそうなほど立派な体であちこちに古傷がある。

顔は……鬼といってもまちがいはあるまい。

「たく……もう少し加減しろ！俺はお前とちがって魔法耐性が高くねーんだ！」

2mの大男は怒鳴る……

「すまない……」

「らしくないじゃないか。普段は任務中は常に冷静でどんな罠もすぐに解いちまうお前が

急にポーとし始めたと思ったら魔法をぶっぱなしまくって敵に見つかり捕まるなんて……

おまけに正気に戻ったと思って出した途端にまたポートして……」

どうやらこの大男は私の仲間のような……ふむ、だんだん頭がはつきりしてきたぞ。

ああそうだった！任務を始めたはいいが急に頭に声が響いてきたんだ。『亜空間転送key』

たしかにそう聞こえた……。今回の任務の目的もその鍵の奪取だったな……

ひとりの青年の姿もあった……。『亜空間転送key』……やけに心に引っかかる。

いったい

「まゝたぼーっとする！」

ビツク！

うるさいやつだ……

「耳元で叫ぶ奴があるか！ おかげでせっかく整理していたことがわからなくなってしまうたではないか！」

「……おい、念のため聞いとくが俺の名前は？」
鬼のような顔をちかずけてくる。

「知らん」

きっぱり答える。

大男はまたか……みたいな顔をし

「何回忘れりや気が済むんだ！ 3年も一緒に組んでるといつのに……
いいか？俺の名は鬼利丸きりまる！ 種族は鬼人だ！！」

鬼利丸……

「ああ……鬼利丸か！」
ようやく誰か分かった！ と顔に示す。

「いまごろかよ！ たく……まあいい！ ちょいと騒がしくやりすぎたようだ

……くるぞ！」

ドタドタドタ……

100人はいるだろう。

全員が剣や弓などの武器を持っている。

「なんでい。100人ポツチか……」

鬼利丸がつまらなそうに言う。

「全部俺がやる！　と書いてえとこだが……あいにく鬼棍棒がとられちまつてらあ」

「やくたたず……」

ボソツとつぶやいた

「うるっせぞ！　だいたい誰のせいであんなことになってんのかわかってんのか！？」

おっときこえてしまったか。

だが確かに鬼利丸のせいではないな……仕方ない。

「今回の任務、死者をだすな、とはいわれてないよな？」

「ああ。存分に暴れていいはずだ」

鬼利丸の返事を聞きうれしくて口元が緩む。

「そうか……」

H?ille ?cole Flame (地獄、消えない、
炎)

ルーンを唱え終わった。同時に目の前にあったはずの人影がきえた。だ消えない炎があった。

敵を殺した伊明鑄虞の顔は笑っていた。とても満足そうに……

第4話 伊明鑄虞2（前書き）

最近中学のテストがあったため全くかけておりませんでした。><
本当に遅くなりすぎてすいません

第4話 伊明鑄虞2

「これか……」

鬼利丸は好奇心丸出しで鍵をつまむ

『亜空間転送key』異世界「Nachtmaher」(ナハトウマ
ー)の研究社たちによって作られた
異世界への鍵……

「鬼利丸、お前の馬鹿力で壊さないうちに私の手の上におけ」

「うるせえ！ お前と違って任務中にうっかりミス！ なんてやら
ねーから安心しろよ！」

鬼利丸が威張る。

「ほー、そういえばこの間の任務で奪取する道具をどこかの馬鹿が
握りつぶしたのは

うっかりじゃなかったのか……」

そう言っただけ冷たい視線でめる。

「あ、あれはだなあ、そ、その〜」

あわてて弁解を始める大男、

「まあ、なんでもいいからさっさとその鍵をわたせ」

ほら！ と手を差し出す。鬼利丸はその手に鍵を載せた。

鬼は人や獣人、魔族のどれをも上回るほどの力がある。

だが鬼には力があるかわりに魔法が使えない、魔法耐性がない鬼とその逆の鬼の2種類

が存在しその弱点を付くことで鬼との戦闘は比較的楽になる。

だが鬼はどの種類でも防御力は高いため気を付けてきちんと防御すれば1発や2発は

屁でもない。あくまでも気を付けていれば、だが。

鬼利丸は鍵を渡した。まだ彼に警戒心というものがあればきずいただろう。

だが完全に『彼 鑄虞』を信頼している鬼利丸はきずかなかった。鍵を受取った後の

鑄虞のかすかな変化に……

gl?hend hei? Flame (灼熱の炎)

「え？」

鬼利丸が気がついたときには鑄虞のてから灼熱の炎が自分に向けて放たれたあとだった。

彼が魔法耐性のある鬼だったら鑄虞の魔法なんて屁でもなかっただろう。

「な……ん、で？」

鬼利丸が弱々しく鑄虞にたずねた

「なんで？ そりやお前が邪魔だったからさ。俺は『魔王』鑄虞、

かつては次元の神を

していた。ククク……まあ色々とありいまじゃ神の地位を剥奪されちまったけどな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1286z/>

俺の夢は魔法使い

2011年12月14日23時53分発行